歴史災害研究部会

部 会 代 表 者：　文学部・教授　吉越　昭久
研究メンバー：　大窪　健之、片平　博文、高橋　学、中谷　友樹、矢野　桂司、山崎　有恒

【研究計画の概要】

過去の減災の知恵を抽出し、その知恵を現代の文化遺産防災計画・事業に活かす。具体的には、歴史災害のデータベース化および GIS を援用した地図化などを通した史資料のアーカイブ化、これを活用した歴史災害の復原による過去の減災の知恵の抽出、および過去の減災の知恵を精査し、現代の最新技術の援用により、現代に活かすことができる知恵への修正と有効性の検証を行う。

(1)歴史災害を生き延びてきた減災の知恵に関するデータベース構築【○大窪、吉越、中谷、矢野】

国内外の歴史災害を生き延びてきた都市や建築に内在する減災の知恵に関する史資料、文献などを収集し、 フォーマットシートに整理してデータベースを構築する。今年度は、国内事例の整理を中心に行う。

(2)歴史災害の復原と減災の知恵の抽出に関する研究【○吉越、片平、高橋、山崎】

京都を中心とする歴史災害の復原研究を実施するとともに、年に 3 回ほど学内外の専門家を招き、成果の検討会を開催する。今年度は、歴史災害の復原研究を中心に実施する。

(3)歴史災害の表現方法とGISによる地図化に関する研究【○矢野、吉越、片平、高橋、中谷、山崎】

歴史災害の効果的な表現方法と地図化によって、情報の発信と公開を積極的に進める。当面は、京都の歴史災害と東北地方の津波災害に焦点を絞って実施する。

【研究成果】

Ⅰ. 研究成果の概要

本年度は、過去の減災の知恵を抽出し、その知恵を現代の文化遺産防災計画・事業に活かすための研究を中心に実施した。

具体的には、歴史災害のデータベース化および GIS を利用した地図化などを通した史資料のアーカイブ化、これを活用した歴史災害の復原による過去の減災の知恵の抽出、および過去の減災の知恵を精査し、現代の最新技術の援用により、現代に活かすことができる知恵への修正と有効性の検証などであった。主な研究の課題は、以下のようなものである。

(1)歴史災害を生き延びてきた減災の知恵に関するデータベース構築【○大窪、吉越、中谷、矢野】

国内外の歴史災害を生き延びてきた都市や建築に内在する減災の知恵に関する文献などを収集し、フォーマットシートに整理してデータベースを構築した。今年度は、国内事例の整理を中心に行った。

（2）歴史災害の復原と減災の知恵の抽出に関する研究【○吉越、片平、高橋、山崎】

京都を中心とする歴史災害の復原研究を実施するとともに、学内外の専門家を招き、成果の報告会・検討会を開催した。今年度は、歴史災害の復原研究を中心に実施した。

（3）歴史災害の表現方法とGIS による地図化に関する研究【○矢野、吉越、片平、高橋、中谷、山崎】

歴史災害の効果的な表現方法と地図化によって、情報の発信と公開を進めた。当面は、京都の歴史災害と東北地方の津波災害に焦点を絞って実施する。

Ⅱ. 研究成果の詳細

研究成果の概要で記した（1）～（3）の課題順に、研究成果をあげたい。

（1）国内外の歴史災害を生き延びてきた都市や建築に内在する減災の知恵に関する文献などを収集し、フォーマットシートに整理してデータベースを構築した。具体的な今年度の成果の一例としては、過去の津波災害をしのいできた社寺が、東日本大震災の際にも避難所として地域の避難生活を支えた事例について実態調査を行い、その将来への応用可能性について検討を行った。この成果は「津波避難拠点として機能した社寺」として、東北学 03（はる書房、2014 年 3 月刊行予定）の特集記事に掲載される予定である。他にも琵琶湖周辺の歴史災害（水害）に伴う社寺の避難場所、与謝野町加悦地区の伝統的建造物群保存地区における防災活動、本願寺水道の診断などを行い、これらについては、学会・シンポジウムなどを通して発表してきた。

（2）2013 年 12 月 7 日に、歴史都市防災研究所第 3 回公開セミナーとして、歴史災害研究部会の成果の報告会および検討会を開催した。

内容は、片平博文「大火の復原と検証　ー鴨川を越えた建長の火災ー」、股座真実子「歴史災害研究における史料活用の方法ー地方（じかた）文書を視角としてー」、川崎一朗「1000 年の時間スケールの災害リスクと歴史都市防災の意義」、谷口仁士「地震リスクの定量化評価に伴う歴史災害記録の重要性と問題点」、北原糸子「明治三陸津波の被害調査ー山奈宗真をめぐってー」の 5 件と参加者全員で行った検討会（総合討論）であった。この中でも、谷口仁士の発表は、部会からの要望に基づくもので、工学系からの検証を将来的に行うための布石と位置づけている。これらの発表や参加者による総合討論から判断すると、歴史災害に関する一般的な認知度は上がりつつあることがわかった。

（3）これまで歴史災害に関わって作成した GIS データと、地図化した成果をリストアップし、共通して利用できるように情報の共有化をはかった。

また、それと同時に、GIS データの視角化を検討し、ハーバード大学が公開している web ベースの地理情報共有システムである「 World Map 」を利用して、文化財被災地図の公開システム等の修正を行った。その他に、歴史都市防災研究所の他の研究プロジェクトによる地理情報配信についても、その有用性と課題についての検討を行った。本研究では、他の研究プロジェクトに協力するだけでなく、このような成果を踏まえて、歴史都市防災研究所全体として情報発信能力を高めていきたい。

Ⅲ. 今後の研究計画・展開

本部会で実施してきた前述の 3 つの課題は、歴史災害を捉えて行く上で、非常に大きく必須のものである。しかし、この 1 年の研究活動では、明らかにできない部分も多く存在する。このため、今後もしばらくの間は、この検討を継続していくことが必要かと考える。特に(2)に関しては、もう少し実施回数を増やし、学外だけでなく学内の若手研究者にも報告・検討の機会を増やしたいと考える。

Ⅳ. その他特記事項

東日本大震災にかかわる東北地方・関東地方における文化財被災地図は、歴史都市防災研究所のホームページでも容易にみることができる。